

「消化管内視鏡ハンドブック」

改訂第2版

要町病院副院長 林 貴雄 著

国立京都病院長

三 宅 健 夫

今回、林貴雄博士の「消化管内視鏡ハンドブック」第2版が装いも新たに刊行された。初版が1979年発行であるから、その間、約9年間に8回増刷されたと聞いている。このような発行部数の多い医学関係の教科書としては、あまり他に類をみないのではあるまいか。それほどこの書物は多くの内視鏡医に読まれ、愛され、座右の書として白衣のポケットの中で病院中を走り廻り、そして優れた内視鏡医を育ててくれたのである。

1977年10月、第15回日本消化器内視鏡学会合同秋季大会を、私が会長として奈良市において開催させていただいたとき、パネルディスカッションとして“内視鏡検査の教育法”を取り上げたことがあった。その際、林貴雄博士と共に私はその司会を務め、本学会としては、初めて卒後教育の問題について延々3時間にわたる討論を尽くしたことがあっ

た。

その後、毎年本学会においてこの問題が取り上げられ、1978年には卒後教育法設定委員会が発足し、1979年には卒後教育法カリキュラムが設定され、1981年には日本消化器内視鏡学会認定医制度が発足した。1983年には卒後教育委員会が設けられ、第1回卒後教育セミナーが開催された。1987年卒後教育法改訂小委員会の検討のもとに、新しい卒後教育法が誕生した。これらの端緒となった1977年ごろでは、本学会会員数は約4,300名であったが、1988年3月現在では、会員数は13,667名に達している。因みに1987年度指導医40名、認定医395名、指導施設181、専門医830名が決定された。このように本学会の専門医制度は、ここ10年あまりの歳月の間に、おびただしい会員の増加と、国際的に卓越した業績と、そして後進の多くの内視鏡医の育成およ

び卒後教育の充実をもたらし、多くの病める人たちの診断と治療に貢献したのである。

卒後教育にとって、最も必要なものは研修医たちが常時勉学、実技の助けとなるガイドブックである。しかもそれは簡潔にしてイラストが豊富であり、常時携帯できるような小型のものでなければならない。

本書初版の際に、林博士よりのご依頼があり、推薦の書評を書かせていただいた。そのときにも触れたのであるが、数多くある内視鏡教科書の中で、記載されている内容として、本書は著者の長年のご研鑽が随所に満ちていて、極めて親切に具体的に、いわゆる“コツ”が述べられていて優れたガイドブックである。また、イラストの画を見て、林博士は研究者、臨床医のみならず優れた画家でもあると書いたことがある。

今回第2版が上梓された。初版よりサイズがやや大きい、反面読みやすくなった。イラストは色刷りとなり、付録には種々の用語解説がなされ読者には親切である。初版以来、幾多の内視鏡医を育成してこられた本書が、更に将来に向けて、多くの内視鏡専門医を育てるために、その良き手引きとなることを祈るものである。

A5判 284頁 1988年発行 定価
4,500円(送料300円) 医学書院 刊